

9世紀末～11世紀後半における イエメン・ザイド派勢力の ヒジュラとその変質

——W.マーデルングの
ヒジュラ解釈の再検討を中心に——

栗 山 保 之

は じ め に

「移住・移動」を意味するアラビア語のヒジュラ (Hijra) は、一般には、預言者ムハンマドが622年9月24日にメッカでの迫害を逃れ、メディナに移住した歴史的事象を示すときに用いられる⁽¹⁾。また、この預言者のメディナ移住が、その後のイスラームの拡大において極めて重要な契機となったことから、第二代カリフ＝ウマルの治世〔在位634－644年〕に、メディナ移住が敢行された年の1月1日（西暦622年7月16日）を、ヒジュラ暦元年1月1日としたと伝えられている⁽²⁾。

ところで、ここで注目すべき点は、イスラームの重要な歴史的事象や暦の名称のもととなったヒジュラという概念が、南アラビアの南西端に位置するイエメンの宗教・政治・社会の史的展開過程においても、重要な意味を持っていたということである。

イエメン史におけるヒジュラに関しては、すでに幾つかの先行研究があり、それらの説について筆者は、別稿においてそれぞれの内容と問題点を詳しく検討した⁽³⁾。そこで、ここではその問題点のみを挙げると、従来のヒジュラの解釈は二系統に分かれている。つまり第一は、イエメンの諸部族によって保護された一定の場所をヒジュラとし、そうしたヒジュラの概念はジャーヒリーヤ時代より今日まで存続していると解釈する、R. B.サージェント R. B. Serjeant や D. T.ゴシェノール D. T. Gochenour の説である。第二は、第一の説が主張するような部族によって保護された一定の場所は少なく

とも12世紀以前には存在せず、ヒジュラとは移住や、要塞・避難所などの部族とは関係ない特定の場所を示していたとする、W.マードルング W.Madelung の説である。しかし、第一の説はかならずしも実証的ではなく、また第二の説は個々の事例の提示だけにとどまるものであり、ヒジュラの内容ははまだ明確にされていないのが現在の研究状況である⁽⁴⁾。

さらに、上に述べた先行研究の問題点は、ザイド派の伝記・人名録・年代記といった歴史史料を用いてヒジュラの内容を検討しているにもかかわらず、これらザイド派の諸史料にみえるヒジュラの内容を、イエメンにおけるザイド派勢力の政治的・社会的・宗教的諸活動との関連において十分に検討していない点である。

シーア派諸分派のなかでも教義的・政治的に最も穏健であるザイド派 (al-Zaydiyya) は、9世紀末期にメディナ al-Madina から南アラビアのイエメンに伝わり、同地方のイスラーム化に大きな役割を果たした。イエメン・ザイド派初代イマーム＝ハーディー al-Hādī ʿilāʾ-l-Ḥaqq Yaḥyā b. al-Ḥusayn [245-298/859-911年] のメディナからの到来以降、イマームを中心として政治的・宗教的に結集されたザイド派勢力は、その勢力をイエメンの各地方に着実に拡大していった。そして、このようなザイド派勢力の領域的・政治的拡大とその宗教的・社会的浸透を遂行する上で、きわめて重要な役割を果たしたのが、本稿の検討対象とするヒジュラの内容であった、と筆者は考えている。

イエメンに初めてザイド派が入った9世紀末から、イスマエール派政権のスライフ朝 (Ṣulayḥids) [439-532/1047-1137年] がイエメン全域をその影響下においた11世紀後半までのザイド派勢力のヒジュラについて、W.マードルングは、イエメン・ザイド派関連の諸史料にもとづいて研究をした。しかし彼の研究は、史料にみえるヒジュラの内容を指摘するだけにとどまっており、当該時期におけるザイド派勢力の政治的・社会的活動との関連において十分な分析をおこなっていないように思われる。そこで本稿では、歴代のザイド派イマームの伝記を主要史料とし、併せてイエメンの情報を含む

各種年代記・地理書・地誌・伝承集などの関連史料を適宜参照することによって、W.マードルングの主張の再検討を試み、9世紀末から11世紀後半までのイエメン・ザイド派勢力におけるヒジュラの概念の分析とその機能とを検討してみたい⁽⁵⁾。

第一章 9世紀末～10世紀末のヒジュラ

(1)

ザイド派勢力が初めてイエメンに入った284/897年、イエメン北部の諸都市、例えばサアダ *Ṣa'da* やナジュラーン *Najrān* には、ハウラーン族 *Khawlān*、サアド・ブン・サアド族 *Sa'd b. Sa'd*、ラビーア・ブン・サアド族 *Rabī'a b. Sa'd*、シャーキル族 *Shākir*、ハナージル族 *al-Ḥanājir*、ワダア族 *Wāda'a*、ヤーム族 *Yām*、サキーフ族 *Thaqif*、ジュマア族 *Banū Jumā'*、ハーリス族 *Banū al-Hārith* などの諸部族が居住していた。彼らはジャーヒリーヤ時代から断続的に抗争を繰り返していた。そのため、ハーディーがイエメン入りする直前のサアダやナジュラーンでは、殺人・略奪の横行や家屋の破壊といった社会的混乱が生じていた⁽⁶⁾。

サアダやナジュラーンに居住するこれらの部族は、混沌とした社会情勢を打開するために、メディナのザイド派コミュニティーの指導者ハーディーを、部族間紛争の調停者・仲介者としてイエメンに招請した。ハーディーが招請された理由は、彼がイエメンの諸部族と直接的な利害関係を持たない立場にあり、預言者ムハンマドの血統を引くシャリーフ (*sharif*)⁽⁷⁾ の家系に属していたからであった。この招請に応じたハーディーは少数の近親者、仲間、奴隷などを伴い、284/897年にメディナを發った⁽⁸⁾。イエメンに入ったハーディーはイエメンにおけるザイド派初代イマームとなり、サアダやナジュラーンで頻発していた部族間抗争を調停すると、ザイド派法学を統治理念としたイスラーム国家の建設を目指して、軍事・宣教活動を活発に開始した。

ところで、イエメン・ザイド派法学は、イマーム＝ハーディーの祖父カーシム・アッラッシー *al-Qāsim b. Ibrāhīm b. Muḥammad*

al-Rassi [169-246/785-860年] によって、すでにその基礎が形成されていた⁽⁹⁾。ザイド派の教義を詳細に検討したW.マーデルングに拠れば、カーシム・アッラッシーはヒジュラを、罪深い者や抑圧者が統治する地から移住することとし、ザイド派の徒にとって移住することは義務であるとした⁽¹⁰⁾。カーシムによるこのヒジュラの解釈を継承したイマーム＝ハーディーもまた、「ヒジュラとは不正者たちの統治 (aḥkām al-ẓulma) が為されている家 (dār) から公正な人々 (ahl al-‘adl) の家へ移住することである」と定義して、ザイド派の信徒たちに対して不正者たちの家々からの移動、そしてすでにイエメンに移住していたハーディーのもとに合流すること (iltihāq bi-hi) を呼びかけた⁽¹¹⁾。この結果、イマーム＝ハーディーによって解釈されたイエメン・ザイド派のヒジュラは、圧制や不正がはびこる不正者の統治する地から公正な指導者たるイマームのもとへ移動・移住することを意味するようになった⁽¹²⁾。

イマーム＝ハーディーを中心としたイエメン・ザイド派勢力の軍事・宣教活動を詳細に記録したアリー・ブン・ムハンマド・アルアラウィー ‘Alī b. Muḥammad al-‘Alawī『イマーム＝ハーディー伝 (Sirat al-Hādī ila-’l-Ḥaqq Yaḥyā b. al-Ḥusayn)』には、同勢力のヒジュラに関する幾つかの事例が記されている。たとえば、上記伝記の著者アリーは、イマーム＝ハーディーとともにすでにイエメン入りしていた父ムハンマドに遅れてサアダに到着したが、その時の状況を、つぎのように記している。

アリーは以下のように言った。すなわち [イマーム＝] ハーディーへの私の移住 (hijrati ila-’l-Hādī) は285年ズー・アルヒッジャ月/898年12月のことでありました。その後、私はサアダへ到着しました。サアダではハーディーの総督 (wālī) である私の父ムハンマドと会いました⁽¹³⁾。

ここでのヒジュラは、伝記の著者アリーがイマーム＝ハーディーのもとへ移ったことを述べている。W.マーデルングはこの記事を典拠として、9世紀末のヒジュラとは、「イエメンにいる正義に基づくイマームのもとへ合流するための移住 (emigration to join the

rightful imam in the Yemen)」を意味していたと解釈した⁽¹⁴⁾。

「イエメンにいる正義に基づくイマームのもとへ合流するための移住」と解釈できるヒジュラの用例は、イマーム＝ハーディー以降のザイド派イマームの治世にも見られる。例えば、10世紀末期にヒジャーズ地方からイエメンに到来したイマーム＝マンスール al-Manṣūr bi-'llāh al-Qāsim b. 'Alī al-'Īyānī [310-393/9221-1002年] は、きわめて精緻な租税制度を構築したイマームとして知られるが⁽¹⁵⁾、このイマーム＝マンスールの側近フサイン・ブン・アフマド・ブン・ヤークーブ al-Ḥusayn b. Aḥmad b. Ya'qūb によって著された『イマーム＝マンスール伝 (*Sirat al-Imām al-Manṣūr bi-'llāh al-Qāsim b 'Alī al-'Īyānī*)』には、つぎのようにある。

イマーム＝マンスールの信奉者の一団が殺害された。彼らの中には、イブラーヒーム Ibrāhīm b. Hammām やアブド・アッラー 'Abd Allāh b. Abū Suhaym、アンマール 'Ammār b. Aḥmad がいた。彼らは彼（イマーム＝マンスール）への移住において最も古い彼の教友たちであった (min aqdami aṣḥābi-hi hijratan ilay-hi)⁽¹⁶⁾。

この記事は、390/1000年にナジュラーンで生じたイマーム軍とナジュラーン居民 (ahl Najrān) との抗争の結末を記したもので、ヒジュラがイマーム＝マンスールのもとへ移住してきたザイド派の信徒たちの移動をあらわしていたことがわかる。

以上の諸事例に基づいてW.マーデルングは、9世紀末期から10世紀末期のおよそ100年間のヒジュラを、「イエメンにいる正義に基づくイマームのもとへ合流するための移住」と解釈したのである。確かに、史料にみえるヒジュラを字義通りに解釈するならば、W.マーデルングの主張に同意せざるを得ない。しかし、9世紀末期から10世紀末期までのイエメン・ザイド派勢力をとりまく政治的・社会的状況との関連で、改めてヒジュラの意味を分析してみると、W.マーデルングの解釈には若干の補足を加える必要が生じてくると思われるのである。

(2)

ヒジュラの原義が人間の移動に関わる現象をあらわしている以上、9世紀末期から10世紀末期までのイエメン・ザイド派イマーム勢力におけるヒジュラもまた、ザイド派の信徒たちの移動に関わる多様な現象をあらわしていたと考えられる。

イエメンの外部地域からイエメン・ザイド派勢力のもとへ、人々の移動がみられるようになったのは、イマーム＝ハーディーがメディナからイエメンへ移住した284/897年以降のことである。ザイド派の関連史料に拠れば、ザイド派の人々のイエメンへの移動は、カスピ海南岸のタバリストーン地方 Ṭabaristān とアラビア半島のヒジャーズ地方 al-Ḥijāz との二つの地域から行なわれていた。

9世紀末期～10世紀末期、イエメンに到来したザイド派の人々の出身地域として第一に挙げられるのは、タバリストーン地方であった。『イマーム＝ハーディー伝』に拠れば、イエメン・ザイド派勢力のあいだでは、タバリストーン地方からイエメンに移動してきた人々は、文字通り「タバリストーンの人々（タバリーユーン：al-Ṭabariyūn)」、*「彼（ハーディー）のもとへ移ったタバリストーンの人々（man hājara ilay-hi min al-Ṭabariyin）」*とも呼ばれていた⁽¹⁷⁾。

タバリストーン地方では当時、第四代カリフ＝アリー ‘Alī b. Abū Ṭālib の息子ハサン Ḥasan b. ‘Alī の血統を引くとされる、ハサン al-Ḥasan b. Zayd の創設したアリー朝（‘Alids）[250-316/864-928年]が、その勢力を拡大していた⁽¹⁸⁾。その後、カスピ海南岸のザイド派勢力を統括したナーシル・アルウトルーシュ al-Nāṣir li’l-Ḥaqq al-Ḥasan b. ‘Alī al-Uṭrūsh [230-304/844-917年]は、カスピ海南西岸の山岳地帯ダイラム Daylam やギーラーン Gilān に居住する人々を、イスラームへ改宗させることに成功した⁽¹⁹⁾。また、彼は新たに改宗した人々に対して、イマーム＝ハーディーの率いるイエメン・ザイド派勢力を支援するために、イエメンへ向かうよう喚起したという⁽²⁰⁾。これによって、タバリストーン地方とイエメン地方とのザイド派勢力の間には交流関係があったことがうかがえよう。タバリーユーンと呼ばれた、イエメンに到来したタバリ

スターンの人々とはまさに、タバリスターン地方に居住するザイド派の信徒たちであったのである。

第二にあげられるイエメンに移動した人々の出身地は、ヒジャーズ地方であった。なかでもメディナは、イマーム＝ハーディーの本来の居住地であり、また、カスピ海南岸を拠点とした、ナーシル・アルウトルーシュの故郷でもあった⁽²¹⁾。このことからメディナは当時、ザイド派勢力がイスラーム世界の各地へ進出してゆく拠点であったと考えられる。事実、メディナ近郊のラッス al-Rass に居住していたイマーム＝ハーディーの祖父カーシム・アッラッシーのもとには、イラク地方のクーファや西タバリスターン地方から多くのザイド派の信徒たちが訪れていた⁽²²⁾。また、イブン・イナバ Ibn 'Inaba に拠れば、メッカでは7年もの間、ハーディーの名が金曜礼拝のフトバ (khuṭba) で読み上げられていたという⁽²³⁾。この記録では、フトバがハーディーのイエメン移住の前か後かは判然としないものの、メッカ社会においても同様に、ハーディーを支持するザイド派の信徒が存在していたことがわかる。さらに、両聖都以外のヒジャーズ地方にもザイド派の信徒たちは存在していた。例えば『イマーム＝マンスール伝』の記述に拠れば、10世紀末にアブー・アッライル Abū al-Layl al-Harānī al-Ḥasanī という、アリーの息子ハサンの系統に属するシャリーフが、その家の人々 (ahl bayt-hi)、すなわち預言者の一族や、彼に仕える者たち (man yakhdimu-hu) を伴って、ヒジャーズ地方からイエメンに到着したとある⁽²⁴⁾。このように、9世紀末期から10世紀末期に、イエメン・ザイド派勢力のもとへ移動して来た人々は、カスピ海南岸のタバリスターン地方やヒジャーズ地方を出自とする、ザイド派を信奉する人々であった。

ところで、この時期のザイド派イマーム伝の記述に拠れば、タバリスターン地方やヒジャーズ地方といったイエメンの外部地域に居住するザイド派の信徒たちは、イエメン・ザイド派勢力に対する軍事的な支援を目的として、イエメンに向かっていたことがわかる。例えば、284/897年にイエメン入りしたイマーム＝ハーディーは同年、サアダを拠点としてナジュラーンを支配下におくと、翌年の285

/898-9年にはサアダ南西のバラト Baraṭ やワスハ Waṣḥa を手中におさめ⁽²⁵⁾、ザイド派勢力の拡大活動を本格的に開始した⁽²⁶⁾。285/898-9年、イマーム＝ハーディーはザイド派勢力の戦力増大を図るために、彼の兄弟アブド・アッラー ‘Abd Allāh b. al-Ḥusayn をヒジャーズ地方に派遣した。その結果、アブド・アッラーは、メッカ巡礼のためにヒジャーズ地方を訪れていたタバリストーン地方の人々のうち、およそ50名ほどの人員を引き連れて、サアダに帰還した。これらのタバリストーン地方からイエメンのサアダに到着した人々について、『イマーム＝ハーディー伝』は、つぎのように記している。

イマーム＝ハーディーの支援者たちは、彼のもとへ移動してきたタバリストーンの人々 (man ḥajara ilay-hi min al-Ṭabariyyin) からなる神の道のために戦う人々 (al-mujāhidīyūn) であった。そうして彼らはサアダに到着したのであった⁽²⁷⁾。

上の記事で最も注目すべきことは、この時期サアダに駐留していたイマーム＝ハーディーのもとへ移動してきた人々が神の道のために戦う人々、つまりザイド派をイエメンに広げるための戦闘要員としてみなされていたことである。このような事例は、イマーム＝マンスールの治世中の390/1000年にも確認することができる。『イマーム＝マンスール伝』には、つぎのようにみえる。

彼 (イマーム＝マンスール) はイーヤーン ‘Īyān に滞在していた。その時、ハサン家の人々 (Banū Abū Ṭayyib al-Ḥasaniyūn) がヒジャーズから移住者たち (muhājrin min al-Ḥijāz) としてイマームのもとに到着した。そもそも彼らはこの [イマーム＝マンスールのもとに到着した] 時に、財貨 (amwāl)・解放奴隷 (mawālī)・奴隷 (raqiq)・有力者 (‘uyūn)・軍勢力 (saṭṭana) について大きな権限をもつ人々であった⁽²⁸⁾。

この他にも、イマーム＝マンスールの側近で、ヒジャーズ地方に派遣されたラズィーン・ブン・アフマド Razīn b. Aḥmad は、同地方の諸部族 (qabā’il al-Ḥijāz) を率いてイマーム＝マンスールのもとに帰還したとする記事もみえる⁽²⁹⁾。このように、イエメンの

外部地域から、イマームのもとに到来したザイド派の信徒たちは、あきらかに、イエメンにおける軍事活動に携わる目的をもったザイド派の人々であったといえよう。事実、彼らはイエメン到着後に、イマーム軍を構成する兵員として、軍事活動に従事していた。例えば『イマーム＝ハーディー伝』には、「ハーディーは〔イマーム軍〕の右翼にハムザ族 (al-Ḥamziyūn) を、そして左翼にヤルサム族 (al-Yarsamiyūn) を配置した。また彼は中央にタバリスターンの人々とともに、ハムダーン族と〔タバリスターン以外からの〕移動者たち (muḥājirūn) を配備した」⁽³⁰⁾とあり、また「彼ら (イマーム軍の司令官たち) はハムダーン族を右翼に、ジャアーフィル族 (al-Ja'āfir) を左翼に、そしてタバリスターンの人々と〔タバリスターン以外からの〕移動者たちを中央に配置した」⁽³¹⁾とある。さらに、第三代イマームとなった、ハーディーの息子ナーシル al-Nāṣir Aḥmad b. Yaḥyā [d.322/933年] の治世においても、イエメンに到着したザイド派の信徒たちは、イマーム軍の一翼を担っていた。当時、イエメンの政治情勢は、イスマール派の一分派であるカルマト派の勢力 (al-Qarāmiṭa) が、紅海沿岸の港ガラーフィカ Ghalāfiqa からイエメンに入り、サナア以南のイエメンをほぼ掌握して、北部イエメン支配をめぐってザイド派勢力と対峙していた。北上するカルマト派勢力に対抗するため、イマーム軍の戦力として外来のザイド派の信徒たちは、軍事活動に従事していたのである⁽³²⁾。

また、このような軍事活動に欠かせない兵員や馬匹などを保有した、外来のザイド派勢力の移動もみられた。例えば『イマーム＝マンスール伝』に拠ると、389/998年、ヒジャーズ地方のターイフ al-Ṭā'if からシャリーフ＝カーシム・アッザイディー al-Qāsim b. al-Ḥusayn al-Zaydi なるシャリーフが、配下の騎兵と馬匹およびハスアム族の地方 (balad Khath'am)⁽³³⁾ に居住する人々を率いて、イマーム＝マンスールのもとへ到着し、イマーム軍に合流した。彼らはその後、イマームの命によりサナア以南へザイド派の勢力圏を拡大するために、高原キャラバン・ルートの要衝地ダマール Dhamār へ派遣され、同地にザイド派勢力の拠点を築いた⁽³⁴⁾。このように、

ヒジャーズ地方やカスピ海南岸地域といったイエメンの外部地域に居住していたザイド派を信奉する人々は、軍事的支援のためにイエメンに到来していた。

外来のザイド派の信徒たちは軍事力の供給源としてイエメンに移動してきたが、一方で彼らは、イエメンにおける新天地の獲得を期待して、到来していたことを示す史料もある。『イマーム＝マンスール伝』には、つぎのようにある。

ハサン家の人々は、彼（イマーム＝マンスール）のもとへ行き、彼がティハーマ Tihāma へ出撃することに対する、彼らの所持する資金と彼への支援〔を提供すること〕を言い、そして彼がそれ（ティハーマ）を征服したあかつきには、その統治を彼らに委ねるよう彼に求めた。そこで、彼はこれに応じた⁽³⁵⁾。

先に引用したように、このハサン家の人々とは、ヒジャーズ地方からイエメンに到来してきた人々であった。彼らは、イマーム＝マンスールが紅海沿岸の町アスル ‘Athr⁽³⁶⁾ の掌握を目的として、紅海沿岸の平原地帯ティハーマへの進出を計画していることを知り、イマーム＝マンスールに対して上記のように提言したのである。当時ティハーマは、ザビード Zabīd を首都とするズィヤード朝 (Ziyādids) [203-409/818-1018年] の政治的・経済的影響下にあり、イマーム＝マンスールが求めたアスルもまた、ズィヤード朝の二人の奴隸 (‘abdān) によって統治されていた⁽³⁷⁾。ハサン家の人々がイマーム＝マンスールに提供すると申し出た支援とは、おそらくこのティハーマ遠征に必要な兵員・馬匹・軍事物資などであったと考えられるが、ここで重要な点は、軍事的な支援を提供する交換条件として、ハサン家の人々がティハーマ征服後の統治を要求したことであった。このような、新天地の獲得を求めてイエメンに到来したザイド派の信徒たちは、他にもみられた。『イマーム＝マンスール伝』には、つぎのようにある。

彼（イマーム＝マンスール）のもとに、ティハーマ地方へおりてゆく者たち (munḥadirin ilā al-Tihāma) として、[ヒジャーズ地方の] ハスアム族からの一団 (wafd min Khath‘am) がやっ

てきた。そこでイマームは彼らの地（ティハーマ）へ出発することを許可した⁽³⁸⁾。

ハスアム族の居住する地方の人々がシャリーフ＝ザイディーとともに軍事的支援目的で到来したことはすでに述べたとおりであるが、上に引用したハスアム族もまた同様に、軍事的援助のために到来したものと考えられる⁽³⁹⁾。イマーム＝マンスールは、この軍事的支援の見返りとして、イエメンでの新天地を求めるハスアム族の出発を承認したのである。このように、イエメン外部地域から移住してきたザイド派の人々のなかには、イマームに軍事的支援を提供する代わりに、イエメンに新しい生活の場を求める人々も存在していたことが理解されよう。

以上の検討によって、9世紀末から10世紀末までのザイド派勢力にみえるヒジュラ概念とは、タバリスターン地方やヒジャーズ地方といったイエメン外部地域に居住するザイド派の信徒たちによる、イエメン・ザイド派勢力への軍事的支援とイエメンにおける新天地の獲得とを目的とした、移動の一環であったと解釈できよう。したがって、この時期のヒジュラを単に、「正義に基づくイマームのもとへ合流するための移住」としたW.マードルングの主張は適切ではない、と筆者は考える⁽⁴⁰⁾。いずれにせよ、結果的にはこの時期のヒジュラが、ザイド派勢力の拡大に不可欠な軍事力を外部地域から供給する機能を担い、イエメンにおけるザイド派勢力の拡大活動に、重要な役割を果たしていたことは確かであろう。

第二章 11世紀後半のヒジュラ

(1)

本章では、前章で検討したヒジュラが、11世紀においてはどのように機能していたのか、またその役割に変化は生じたのか、あるいはヒジュラの機能に何らかの変化が確認された場合、それは如何なる理由に起因するもののかなどについて考察する。

イマーム＝マンスールが393/1002年に没すると、彼の最年少の息子フサイン al-Husayn al-Mahdi li-Din Allāh が、401年サファル

月/1010年9-10月にヒムヤル族 Ḥimyar やハムダーン族などの諸部族の支持を得てイマームおよび救世主 (mahdi) を宣言し、サナアやサアダ、そしてその他の北部イエメンの主要地域を掌握した。ところがその後、フサインを支援していた諸部族が離反し、404年サファル月4日/1013年8月15日にライダ Rayda 近郊のズー・ウラル Dhū Urār でのハムダーン族との戦闘において、フサインは戦死した⁽⁴¹⁾。

中世イエメンの言語学者・歴史学者ヒムヤリー Nashwān b. Sa'īd al-Ḥimyarī [d.573/1178年] の『純真な黒い眼 (*al-Ḥūr al-ʿĪn*)』に拠れば、「彼(フサイン)は大地に公正さ ('adl) を満たすまで死ぬはずはない。そもそも彼は彼ら(フサインを支持する人々)の間において、統率者 (qā'im) であり、救世主であり、そして待ち望まれる者 (muntazar) であるからだ」⁽⁴²⁾ とあるように、フサイン没後の11世紀後半にも、引き続きこのフサインを支持する人々が存在していたことがわかる。彼らはフサイニーヤ (al-Ḥusayniya) と呼ばれ、11世紀後半においてザイド派勢力の一派としてその勢力を誇っていた。当時、フサイニーヤを統率していたのは、イマーム＝マンスールの孫であるシャリーフ＝アルファーディル Sharif al-Faḍīl al-Qāsim b. Ja'far b. al-Qāsim [d.468/1075年] とシャリーフ＝ズー・アッシャラファイン Sharif Dhū al-Sharafayn Muḥammad b. Ja'far b. al-Qāsim [d.478/1085年] であり、フサイン没後のフサイニーヤをイエメン・ザイド派勢力内における最大の政治的・軍事的党派へと成長させていた。後述するザイド派勢力内のハダウィーヤ (al-Hadawiya) といった党派と比較して、フサイニーヤにみられる教義的な特色のひとつは、彼らの救世主思想にあった。自ら救世主であると宣言したイマーム＝フサインを支持するこの党派は、フサインが救世主としていつの日か再臨し、イマームとしてフサイニーヤの党派を導いてくれると考えていた。そのため、フサイニーヤを率いたシャリーフ＝アルファーディルとシャリーフ＝ズー・アッシャラファインの二人はいずれもイマーム位を主張せず、共にアミール (amir) としてフサイニーヤをまとめていた。

さて、9世紀末から10世紀末までのヒジュラは、軍事的支援と新天地の獲得とを目的としたザイド派勢力の「移動」と解釈できたが、11世紀に著されたザイド派の関連史料を仔細に検討してみると、11世紀のヒジュラには「移動」とは解釈できないヒジュラの用例がみられるようになった。

W.マーデルングは、この「移動」と解釈できないヒジュラが、「イエメンにおける特定の場所 (specific localities in Yemen)」という意味で用いられていたと指摘し、さらにそれは「ザイド派の要塞 (stronghold)・避難所 (safe refuge)」としての機能を担っていた、と解釈した⁽⁴³⁾。W.マーデルングの解釈の典拠としたヒジュラの事例とは、当時フサイニーヤの拠点であったシャハーラ Shahāra が462/1070年、11世紀前半に急速に台頭してきたスライフ朝の軍に包囲された折に、シャハーラに籠城していたシャリーフ＝ズー・アッシャラファインが作成した訓令 (waṣīya) にみえる内容の一節である⁽⁴⁴⁾。七項目から構成された訓令の最終項にみえる「このヒジュラ (hādhih al-hijra)」という文言が、まさにシャハーラという特定の場所を示していたこと、そしてそのシャハーラが対スライフ朝戦用の要塞として機能していたことを根拠として、W.マーデルングは上記のように解釈したのである⁽⁴⁵⁾。

ヒジュラが「イエメンにおける特定の場所」を意味するようになったと推測できる事例は、W.マーデルングが典拠としたもの以外にも確認できる。以下に、その例を示してみよう。11世紀末に著された、ムファリジュ・ブン・アフマド・ブン・ムハンマド・アッラビーイー Mufarrij b. Aḥmad b. Muḥammad al-Rab'ī の『二人の崇高にして偉大なるアミール伝 (*Sīrat al-Amirayn al-Ajallayn al-Sharafayn al-Fādilayn*)』に拠れば、シャリーフ＝ズー・アッシャラファインはシャハーラの人々を「このヒジュラの人々 (ahl hādhih l-hijra)」と呼び、またシャハーラの諸事項を「このヒジュラの諸事項 (umūr hādhih al-hijra)」と述べていた⁽⁴⁶⁾。このような記事からも、11世紀のヒジュラが「イエメンにおける特定の場所」を示していたとするW.マーデルングの分析は、首肯することができる。

ところが W.マーデルングは、「特定の場所」を意味するヒジュラとしてのシャハーラが、「要塞・避難所」として機能していたと主張する一方で、当時シャハーラと同じくヒジュラとされていたサアダについては、そのヒジュラとしての性格に関して一切分析をしていないのである。また W.マーデルングは、11世紀後半のヒジュラの意味が、彼の解釈した「正義に基づくイマームのもとへ合流するための移住」から「イエメンにおける特定の場所」、すなわち「要塞・避難所」へと転化した理由についても、言及していないのである。

(2)

本節では、11世紀後半のイエメン・ザイド派勢力にとって、ヒジュラとされたシャハーラおよびサアダがどのような機能をもっていたのかを考察することによって、W.マーデルングによるヒジュラの解釈を再検討し、あわせてその意味の変質理由についても検討する。

シャハーラは、サナアの北西約110キロメートルに位置し、切立った崖によって周囲と完全に遮断された急峻な山岳地帯にある、およそ2600メートルの山の頂に建設された町である⁽⁴⁷⁾。10世紀の南アラビアの地理学者ハムダーニー al-Hamdānī に拠れば、シャハーラはイエメンの山岳地帯にある有名な要塞のひとつとして、すでにジャーヒリーヤ時代から知られていた⁽⁴⁸⁾。『二人のアミール伝』は、11世紀のザイド派勢力の動向を知る上で貴重な史料であるが、そこには「シャハーラの諸事およびシャリーフ＝ズー・アッシャラファインの統治期に建設された建築物（‘imāra）とその改修に関する記述」という一節があり、11世紀のシャハーラについて、つぎのように記されている。

（シャハーラには）いくつかの水場（manāhil）があり、その一つは東側にある溜池（majil）、要塞の中央にある溜池、それからもうひとつはシッリー門（bāb al-Ṣirri）に沿ってある。（中略）またウバイド門（bāb al-‘Ubayd）の下にある東側の地下水溝（ghayl）⁽⁴⁹⁾の側には、ふたつの井戸がある⁽⁵⁰⁾。

また、シャリーフ＝ズー・アッシャラファインが息子のジャアファル Ja'far b. Muḥammad に、シャハーラについて「このヒジュラの人々は、彼ら自身によって以外には、傷つけられることは決してなく、要塞は〔敵が侵入することを〕禁じ、食糧は大量にあり、その水場は〔水を〕満たしている」と説明し、シャハーラが外界と隔絶された都市であることを強調している⁽⁵¹⁾。以上の意味で、11世紀のシャハーラは、外敵の侵入を許さない周囲の自然環境に加えて、多量の食糧を備蓄し溜池や井戸などの生活用水の供給施設を備えた、まさに要塞的な都市であったといえよう⁽⁵²⁾。

ところが、シャハーラと同様にヒジュラとされたサアダについて検討してみると、サアダは、W.マーデルングが述べるような、ザイド派勢力の「要塞・避難所」として、必ずしも十分な機能を有してはいなかったようである。

アラビア半島の高原部を南北に走る内陸の交通ルートの要衝サアダは、北部イエメンの高原平野部に位置し、古くからその名が知られていた。12世紀中葉の地理学者イドリーシー al-Idrisi にも説明があるように、皮なめし工場の町 (balad al-dabbāgha) と呼ばれたサアダでは、イエメン全域やヒジャーズ地方に向けて特産品の皮革製品が生産されていた⁽⁵³⁾。10世紀半ばの地理学者ムカッダシー al-Muqaddasi に拠れば、「その町から良質のなめし皮が輸出される。そこ (サアダ) はアリー派の首都であり、彼らの政庁所在地である (madīnat al-‘alawīya wa ‘aml-hum)」とあり、また10世紀の地理学者イスタフリー al-Iṣṭahri にも「そこ (サアダ) には、商人たちや財貨の集まるところがある。ザイド派 (al-zaydi) として知られたフサイン家の人々 (al-Ḥusayni) がそこを拠点としている」⁽⁵⁴⁾とみえるように、サアダは、10世紀中葉には皮なめし製造の中心地であり、それと同時にすでにザイド派勢力の拠点となっていたことがわかる。ザイド派勢力がサアダをその拠点とした経緯について、13世紀の南アラビアの地誌を著したイブン・アルムジャーウィル Ibn al-Mujāwir に拠れば、イマーム＝ハーディーのイエメン到来以前のサアダは荒廃していたが、ある商人によって大モスクが建設

されると、イマーム＝ハーディーはそこを彼の拠点 (maqām) とし、彼とともに多くの人々が居住し、都市 (madina) を建設して、市場 (aswāq) をつくった、という⁽⁵⁵⁾。

しかし、このようにイエメン有数の都市となっていたサアダはその防衛上、必ずしも堅牢な都市とはいえなかった。後述するように、11世紀初頭に急速に台頭してきたスライフ朝の攻撃と包囲によってサアダは数次に亘って落城し、その防備上の脆弱さをたびたび露呈していたからであり⁽⁵⁶⁾、例えば447/1055年、ティハーマ遠征に出ていたスライフ朝軍の帰還の知らせを受けたシャリーフ＝アルファーディルは、それまで駐留していたサアダからスライム族の地 (balad Banū Ṣuraym) へ急遽、退去している⁽⁵⁷⁾。このようなことから、ヒジュラとしてのサアダについて、「要塞・避難所」としての機能があったとするW.マーデルングの主張は、再考すべきであると思われる。

11世紀のヒジュラが「特定の場所」を意味し、それがシャハーラおよびサアダの二都市を指していたことは、W.マーデルングが述べるとおりである⁽⁵⁸⁾。しかし、「要塞・避難所」とは解釈できないことから、以下では、この時期のシャハーラとサアダについて、両都市がザイド派勢力にとってどのようにみなされていたのかを検討することによって、この時期のヒジュラの機能を考えてみたい。

463/1071年、シャハーラに駐屯するシャリーフ＝ズー・アッシャラファインは、すでにジャウフ al-Jawf よりスライフ朝軍攻撃のため出撃していたシャリーフ＝アルファーディルと連携し、ダマル北西のアンズ 'Ans 地方のナウサーン Nawsān に駐留していたスライフ朝軍に攻撃をくわえて、これを殲滅した。『二人のアミール伝』は、同地方を制圧しその支配下においたシャリーフ＝ズー・アッシャラファインの功績を称えた後、彼のシャハーラへの帰途について、つぎのように述べている。

遊牧民たちは、彼 (シャリーフ＝ズー・アッシャラファイン) への服従を受け入れた。そうして彼は、彼の権威の場 (mustaqarr 'izz-hu) へと出発した⁽⁵⁹⁾。

この記述の注目すべき点は、シャリーフ＝ズー・アッシャラファインの帰還先であったシャハーラが、彼の権威の場とみなされていた点である⁽⁶⁰⁾。シャハーラをこのように表現した事例は、他にも確認できる。例えば、『二人のアミール伝』の468/1075年の記述は、シャハーラに駐留するシャリーフ＝ズー・アッシャラファインのもとからシャリーフ＝アルファーディルがサナア北方に位置するアムラーン‘Amrānに移り住んだことを述べるが、その冒頭には、つぎのように記されている。

アムラーンの描写に関する情報の記述。つぎのことが言われている。すなわち、468/1075年に、シャリーフたち（shurafā’）やスルターンたち（salāṭīn）が諸要塞から出て、彼らは彼らの権威の場、すなわちシャハーラ（mustaqarr‘izz-humu Shahāra）に到着した時、シャリーフ＝アルファーディルは彼の馬匹や家族とともにワーディー・バヌーアルドゥアーム（Wādī Banūal-Du‘ām）に住むことを決心した⁽⁶¹⁾。

前節の冒頭にすでに述べたように、フサイニーヤのシャリーフ＝ズー・アッシャラファインとシャリーフ＝アルファーディルとは、それぞれイマームとほぼ同等の政治的権限を有するアミールとして、共にフサイニーヤを統率する立場にあった。また党派としてのフサイニーヤは、サアダを拠点としたザイド派の一派ハダウィーヤがスライフ朝の度重なるサアダ占領による弱体化していたため、当時のザイド派勢力内においては、政治的優勢の地位にあった。このことから、上に引用した二つの史料にみえる「権威」とは、当時のザイド派勢力を政治的に主導していたフサイニーヤを統率する政治的な力と解釈できよう。そしてこのような政治的な権威が存在する場としてのシャハーラとは、換言すれば、11世紀後半におけるザイド派勢力全体の政治的権威が所在する場を意味していた、と考えられるのである。

それでは、シャハーラが政治的権威の所在する場とみなされていたとすれば、この時期にシャハーラと同様にヒジュラとされていたサアダは、どのようにみなされていたのであろうか。すでに述べた

ように、9世紀末、イマーム＝ハーディーがその拠点をサアダに築いた後、10世紀半ばには同都市は早くもザイド派勢力の政治的・宗教的中心地となっていた⁽⁶²⁾。そのため、およそ11世紀前半までのサアダには、イマーム＝ハーディーの子孫らが中核となって形成された、ザイド派勢力の一派派ハダウィーヤの拠点が置かれていた。しかし、サアダを拠点としていたハダウィーヤは、度重なるスライフ朝の攻撃によって弱体化を余儀なくされ、ザイド派勢力内における政治的主導権は、フサイニーヤにとって代わられていた。その結果、11世紀前半以降のザイド派勢力の政治的拠点は、サアダからフサイニーヤの拠点シャハーラに移行したのである。

さて11世紀後半になると、フサイニーヤがスライフ朝支配下のサアダ解放に繰り返し尽力していたことが、史料からうかがえる。例えば448/1056年、フサイニーヤに属するシャリーフ＝アルファーディルはスライフ朝占領下のサアダを一時的に奪回している⁽⁶³⁾。また、463年ラマダーン月/1071年6月には、シャリーフ＝アルファーディルがハダウィーヤからのサアダ解放要請に応えて、サアダを占領し、再びザイド派勢力のもとに取り戻している⁽⁶⁴⁾。このように、数次にわたってスライフ朝により占拠されたサアダの奪還に、フサイニーヤをはじめとするザイド派勢力が固執した理由は、以下に述べるように、サアダがザイド派諸党派にとって宗教的に極めて重要な場、すなわち聖域であったからであると考えられる。

298/911年に死亡したイマーム＝ハーディーは、サアダの大モスクに附設された墓に埋葬されることとなったが、その墓の設置場所について、13世紀に編纂されたイマーム＝ハーディーのハディース集には、以下のように記されている。

つぎのことが言われている。すなわち彼（イマーム＝ハーディー）とともに〔戦い〕殺害された者や死亡した者は、〔イマーム＝ハーディー・〕ヤフヤー・ブン・アルフサインの隣に埋葬されると、彼（イマーム＝ハーディー）の教友たちは彼から聞いていた⁽⁶⁵⁾。

この伝承のために、第二代イマーム＝ムルタダー Imām al-Murtadā

Muḥammad b. Yaḥyā [d.310/922年] は、ハーディーの墓をつぎのように造営した。

[イマーム＝ムルタダー・] ムハンマドは、タバリストーンからの移住者たち、サナアの人々 (Ṣan'āniyin) やサアダの人々 (Ṣa'diyyin) やその他の人々、そして全てのムスリムたちからなる殉教者たち (shuhadā') の墓地の南側に、[イマーム＝ハーディー・] ヤフヤーの墓を掘るように命じた⁽⁶⁶⁾。

さらにこの後、イマーム＝ムルタダーやイマーム＝ナーシルといった歴代イマームの多くがイマーム＝ハーディーの墓所の近くに葬られた⁽⁶⁷⁾。こうして、大モスク附設の墓地は、彼の墓所と、歴代のイマームやザイド派勢力の拡大に殉じた移住者たちや都市住民たちの墓から、形成されたのである。この結果、イマーム＝ハーディーのこの墓所には、彼の恩寵 (baraka) を求めるザイド派の人々が、イエメンの各地域から参詣に訪れるようになった。イマーム＝ハーディーのハディース集には、つぎのように記されている。

彼 (イマーム＝ハーディー) の墓には、彼の恩寵や彼 [の墓所] を参詣することについて賞賛する者が、現れた。(中略) そしてハーディーの子孫たちで諸地方 [に居住する] 人々や、サアダの住民たち (ahl Ṣa'da) で行い正しい人々は、ここ (イマーム＝ハーディーの墓) を訪れることを、ともに急いだ⁽⁶⁸⁾。

このような墓参が、いつ頃から始まったのかは定かではないものの、『イマーム＝マンスール伝』には、以下のようにみえる。

[389年ムハッラム月/999年1月に、] イマーム＝マンスールは、彼の軍勢の全てとともにサアダに入城した。そうして彼は大モスクに入って、[イマーム＝ハーディーとその他のイマームたちの] 墓を詣でた (zāra al-qubūr)⁽⁶⁹⁾。

この記事から、遅くとも10世紀末期には、イマーム＝ハーディーの墓所への参詣が慣行化していたことがうかがえよう。いずれにせよ、恩寵を得るために参詣の対象となったイマーム＝ハーディー墓所は、ザイド派勢力にとって聖なる地域になっていたと考えられる⁽⁷⁰⁾。それゆえ、イマーム＝ハーディーがイエメン・ザイド派初代

イマームとして、その宗教的な礎を築いた人物であったことを考え合わせると、聖域としての墓所があったサアダとは、イエメン・ザイド派勢力にとって、宗教的權威の所在する場としてみなされていたと考えることができよう。

以上の検討から、この時期のヒジュラは、W.マーデルングの主張する「要塞・避難所」とするよりも、むしろ「特定の場所」としての、ザイド派勢力の政治的・宗教的權威の所在する場と解釈する方が、より適切であると考ええる。

さて最後に、11世紀後半を境にして、ヒジュラの意味が、軍事的支援と新天地獲得を目的とした移動から、ザイド派勢力の政治的・宗教的權威の所在する場へと変質した理由について述べてみたい。

439/1047—8年、サナア南西の山岳地帯であるハラズ地方のマスール Masār を拠点として急速に台頭してきた、イスマール派政權スライフ朝の出現は、それまでのイエメンの政治的・社会的諸状況を大きく変容させることとなった。スライフ朝初代君主アリー ‘Alī b. Muḥammad al-Ṣulayḥī は同年、ハドゥール Ḥaḍūr 近郊のスーフ Ṣūf において、サナアの支配者でハムダーン族の長アブー・ハーシド Abū Ḥāshid をうち破り、サナアとその周辺諸地域を掌中に収め、455/1063年までにメッカ以南からアデンまでのイエメン全域を支配下においた⁽⁷¹⁾。このようなスライフ朝の隆盛に押されたイエメン・ザイド派勢力は、徐々に弱体化を強いられていった。イマーム＝アブー・アルファトフ Abū al-Faṭḥ 率いるザイド派勢力は444/1052年、ナジュド・アルジャーフ Najd al-Jāḥ においてスライフ朝軍と衝突し、イマーム＝アブー・アルファトフを含むザイド派の人々が多数戦死し、大敗を喫した⁽⁷²⁾。また448/1056年、シャリーフ＝アルファーディルは、ハムダーン族に属する諸部族民の喚起によって、スライフ朝に対し武装蜂起したものの、逆にワダア地方 (bilād Wāda‘a) のヒラーバ要塞 (ḥisn Hirāba) へ追い込まれ、70日間に及ぶスライフ朝軍の包囲を受けた後、スライフ朝軍に投降した⁽⁷³⁾。このような政治的劣勢を打開するため、ザイド派勢力はメッカやメディナのシャリーフ政權と数次にわたって接触を

試み、スライフ朝政権打倒のための軍事的支援を要請したが、いずれも失敗に終わった⁽⁷⁴⁾。

ザイド派勢力を取り巻く、このような政治的・社会的情勢の変化は、ザイド派勢力の存続にとってきわめて不利な状況をつくりだすこととなった。そのため、イスラーム世界各地のザイド派の人々はイエメンへの移動を忌避するようになったと考えられる。事実、イエメンにおけるスライフ朝の興隆に呼応するように、イエメンに到来するザイド派の信徒たちはみられなくなり、それとともに移動を意味するヒジュラの用例は史料上、あらわれなくなったのである。その一方で、ザイド派の政治的・宗教的権威が所在する特定の間としての意味を帯びるようになったヒジュラは、スライフ朝政権の伸長に伴って弱体化していったザイド派勢力を精神的・物理的に保持する間としての役割へと変質していったのである⁽⁷⁵⁾。

おわりに

W.マーデルングは、9世紀末から10世紀末までのヒジュラを「正義に基づくイマームのもとへ合流するための移住」ととし、さらに11世紀後半までのヒジュラを「特定の場所」としてのシャハーラとサアダであり、そしてそれは「要塞・避難所」として機能していたと主張した。

しかし、以上の検討から、9世紀末から11世紀後半までのヒジュラ概念はむしろ、つぎのように解釈されるべきであろう。すなわち、9世紀末から10世紀末までのヒジュラは、軍事的支援と新天地獲得とを目的とした、イエメン・ザイド派イマームのもとへの移動を意味していた。ところが、11世紀前半から後半のイエメンの政治的・社会的情勢の急変によって、ザイド派勢力の存続が危ぶまれるようになると、ヒジュラはザイド派勢力の政治的・宗教的権威の所在する特定の場を意味するように変質し、その場は同勢力を精神的・物理的に維持する機能を持つようになったのである。

ザイド派勢力のこのようなヒジュラ概念は、同勢力がイエメンに拡大・維持する上で、極めて有効な機能を有していたといえよう。

そして、別稿においてすでに述べたように、11世紀後半以降になると、在地の諸部族民の間からもザイド派法学をはじめとするイスラーム諸学の修得を志す人々が増加してゆき、これに伴ってヒジュラの機能もまた、修学・修業の場へと変容してゆくのである。しかし、ヒジュラの機能に変化が生じたとしても、ザイド派勢力をイエメンに拡大・浸透させてゆくという点においては、同様の役割を果たしていたと考えられるのである。

註

- (1) ムハンマドのヒジュラ以前のヒジュラとして、615年頃にメッカ社会での迫害を避けるために、何十人かの、ムスリムになりたての人々が、エチオピアへ移ったこともまた、重要な出来事であることは言うまでもない。cf. 後藤明『マホメットとアラブ』朝日文庫、1991年、134-135頁。
 “AL-MUHĀDJIRŪN”, *E.I.* new ed. VII, pp.356-357.
- (2) “HIDJRA”, *E.I.* new ed. III, pp.366-367. なお医王秀行氏は近年ヒジュラ暦元年の開始時期について新しい見解を提示した。医王秀行「ユダヤ暦との関わりから見たジャーヒリーヤ時代の暦法」『オリエント』第43巻第2号、2000年、30-52頁。
- (3) 拙稿「11世紀後半～12世紀前半におけるイエメン・ザイド派勢力のヒジュラームタッリフィーヤのヒジュラの検討を中心として」『東方学』第102号、2001年、1-15頁。
- (4) R.B.Serjeant, “Ṣan‘ā’ the ‘Protected’, *Hijrah*”, *Ṣan‘ā’: An Arabian Islamic City*, ed. R.B.Serjeant, R.Lewcock, London, 1983, pp.39-43., D.T.Gochenour, *The Penetration of Zaydi Islam into Early Medieval Yemen*, ph. D.thesis. Havard Univ., 1984., W.Madelung, “The Origins of the Yemenite Hijra”, *Arabicus Felix: Luminosus Britannicus Essays in Honour of A.F.L.Beeston on his Eightieth Birthday*, ed. Alan Jones, Oxford, 1991, pp.25-44. これら先行研究の紹介と問題点は、拙稿「11世紀後半～12世紀前半におけるイエメン・ザイド派勢力のヒジュラ」1-2頁参照のこと。
- (5) 本稿で利用する史料とその略号を挙げる。

イマーム伝記

al-Ḥadā'iq: al-Muḥalli [d.652/1254], *Kitāb al-Ḥadā'iq al-Wardiya fi A'immat al-Zaydiya*, 2vols., Dimashq, n.d.

al-Ifāda: Ḥusayn b. Hārūn al-Hārūnī [d.432/1032], *al-Ifāda fi Ta'rikh A'immat al-Zaydiya*, ed. Muḥammad Yaḥyā Ṣāliḥ, Ṣan'a', 1996.

Sirat al-Amirayn: Mufarrij b. Aḥmad b. Muḥammad al-Rab'i [d.ca.12c], *Sirat al-Amirayn al-Ajallayn al-Sharafayn al-Fāḍilayn al-Qāsim wa Muḥammad Ibya Ja'far b. al-Imām al-Qāsim*, al-Jāmi' al-Kabir, Ta'rikh 117, Ṣan'a'.

Sirat al-Hādī: 'Alī b. Muḥammad al-'Alawī [d.10c], *Sirat al-Hādī ila-'l-Ḥaqq Yahyā b. al-Ḥusayn*, ed. Suhayl Zakkār, Dimashq, 1972.

Sirat al-Nāṣir: 'Abd Allāh b. 'Umar al-Hamdānī [d.ca.11c], *Sirat al-Imām al-Nāṣir li-dīn Allāh Aḥmad b. Yaḥyā*, ed. W.Madelung, Oxford, 1990.

Sirat al-Manṣūr: al-Ḥusayn b. Aḥmad b. Ya'qūb [d.11c], *Sirat al-Imām al-Manṣūr bi-'llāh al-Qāsim b. 'Alī al-Ṭyānī*, ed. 'Abd 'Allāh al-Ḥibshi, Ṣan'a', 1996.

年代記

Ghāyat: Yaḥyā b. al-Ḥusayn [d.1100/1689], *Ghāyat al-Amānī fi Akhbār al-Quṭr al-Yamani*, ed. Sayyid 'Abd al-Fattāḥ 'Āshūr, 2vols., al-Qāhira, 1968.

地理書

al-Idrisi: al-Idrisi, *Kitāb Nuzhat al-Mushtāq fi al-Ikhtirāq al-Āfāq (Opus Geographicum)*, ed. Instituto Universitario di Napoli, 2vols., Leiden, 1970-84.

al-Iṣṭakhri: al-Iṣṭakhri, *Masālik al-Mamālik*, ed. M.J.de Goeje, Leiden, 1967.

al-Muqaddasi: al-Muqaddasi, *Kitāb Aḥsan al-Taqāsim fi Ma'rifat al-Aqālim*, ed. M.J.de Goeje, Leiden, 1967.

Şifat: al-Hamdāni, *Şifat Jazirat al-‘Arab*, ed. Muḥammad b. ‘Alī al-Akwa‘, Ṣan‘ā’, 1990.

Ta’riḫ al-Mustabşir: Ibn al-Mujāwir, *Şifat Bilād al-Yaman wa Makka wa Ba‘ḍ al-Ḥijāz*, (*Ta’riḫ al-Mustabşir*), ed. Lögren O., 2vols., Leiden, 1951, 1954.

Ta’riḫ Ṣan‘ā’: Ishāq b. Yaḥyā b. Jarir al-Ṭabari al-Ṣan‘āni [d. 450/1058], *Ta’riḫ Ṣan‘ā’*, ed. ‘Abd Allāh Muḥammad al-Ḥibshī, Ṣan‘ā’, n.d.

その他

Durar al-Aḥādīth: ‘Abd Allāh b. Muḥammad b. Ḥamza [d.646/1248], *Durar al-Aḥādīth al-Nabawiya bi-‘l-Asānid al-Yaḥyāwiya*, ed. Yaḥyā ‘Abd Allāh al-Fuḍayl, Beirut, 1979.

al-Ḥūr al-‘Īn: Nashwān b. Sa‘īd al-Ḥimyarī [d.583/1187], *al-Ḥūr al-‘Īn*, ed. Kamāl Muṣṭafā, Ṣan‘ā’, 1985.

‘Umdat: Ibn ‘Inaba, *‘Umdat al-Ṭālib fi Ansāb Āl Abi Ṭālib*, Beirut, n.d.

(6) *Sirat al-Hādī*, p.68.

(7) サイド・シャリーフについては、森本一夫「サイイドとシャリーフームハンマドの一族とその血統―」『岩波講座 世界歴史10』岩波書店、1999年、293-315頁を参照。

(8) 拙稿「中世イエメンのザイド派イマームと部族」『日本中東学会年報』第13号、1998年、215-232頁参照。

(9) “AL-RASSĪ”, *E.I.* new ed. VIII, pp.453-454.

(10) W.Madelung, *Der Imam al-Qasim ibn Ibrahim und die Glaubenslehre der Zaiditen*, Berlin, 1965, pp.138-140.

(11) Riḍwān al-Sayyid, “al-Dār wa al-Hijra wa aḥkām-hā ‘inda Ibn al-Murtaḍā”, *Majallat Kulliyat al-Ādāb*, 14, 1993, Ṣan‘ā’, p. 54.

(12) 前掲拙稿「11世紀後半～12世紀前半イエメン・ザイド派勢力のヒジュラ」参照。

(13) *Sirat al-Hādī*, pp.115-6. なお、引用した史料中のカッコ () は

同意語、大カッコ [] は達意の為の筆者による補完である。以下同様。

- (14) W.Madelung, "The Origins of the Yemenite Hijra", p.27.
- (15) イマーム＝マンスールの租税制度に関しては、拙稿「中世イエメンにおけるザイド派イマームの租税制度」『東方学』第98号、1999年、132－121頁を参照のこと。
- (16) *Sirat al-Manşūr*, p.201.
- (17) *Siirat al-Hādī*, pp.116,136.
- (18) "AL-ḤASAN b. ZAYD b.MUḤAMMAD", *E.I.* New ed. III, p. 245.
- (19) *al-Hadā'iq*, p.30.
- (20) *al-Ifāda*, pp.153-154.
- (21) *al-Hadā'iq*, II, p.28.
- (22) "AL-RASSI" *E.I.* new. ed. VIII, pp.453-454.
- (23) "*Umdat*", p.204.
- (24) マンスールを訪れたアブー・アッライルはその後、メディナに在住するザイド派勢力に対し、当時ヒジャーズ地方を支配下においていたエジプトのファーティマ朝政権に抗するよう呼び掛けにメディナへ向かった (*Sirat al-Manşūr*, pp.61-62)。なお、これらのほかに例えば、ムギーラ・ブン・バドル al-Mughira b. Badr (*Sirat al-Manşūr*, p.61) なる人物やメディナの支配者のフサイン・ブン・アブー・アルハサン・ブン・ムスリム al-Ḥusayn b. Abū al-Ḥasan b. Muslim の使節などがイエメンのイマームのもとにやってきた (*Sirat al-Manşūr*, p.151)。
- (25) *Ṣifat*, p.311.
- (26) *Ghāyat*, I, pp.169-170.
- (27) *Sirat al-Hādī*, p.116.
- (28) *Sirat al-Manşūr*, p.130.
- (29) *Sirat al-Manşūr*, pp.195, 197.
- (30) *Sirat al-Hādī*, p.190.
- (31) *Sirat al-Hādī*, p.241. タバリスターンからの移住者の中には、地方統治を任されるものもあった。たとえば、*Sirat al-Hādī*, pp.211－212 参照。

- (32) *Sirat al-Nāsir*, pp.28, 31, 45, 67. イエメンにおけるカルマト派勢力の活動の概要については、以下を参照のこと。拙稿「中世イエメンにおけるカルマト派の活動－イエメン・ザイド派イマーム政権研究の一齣－」『中央大学アジア史研究』第24号、2000年、223－238頁。
- (33) ハスアム族は、イエメン～メッカ道に沿ってナジュラーンとターイフとの間の地域を支配領域としていた。q.v. “KHATH‘AM”, *E.I. new. ed.* IV, pp.1105-1106.
- (34) *Sirat al-Manṣūr*, p.53, *Ta’rikh Ṣan ‘ā’*, p.108.
- (35) *Sirat al-Manṣūr*, pp.144,205.
- (36) “ATHR”, *E.I. new. ed.* I, pp.737-738.
- (37) *Sirat al-Manṣūr*, p.40., cf. G.R.Smith, “The Political History of the Islamic Yemen down to the First Turkish Invasion (1-945/622-1538)”, *Yemen: 3000 Years of Art and Civilization in Arabia Felix*, ed. W.Daum, Innsbruck-Frankfurt-am-Main, 1988, pp.129-139.
- (38) *Sirat al-Manṣūr*, p.147.
- (39) ハスアム族の間で生じた混乱 (ikhtilāl) に関する不満を記した書簡を受けたイマーム＝マンスールは、その混乱の収拾に努めていることから、ハスアム族とイマーム＝マンスールとの関係は密接であったと考えられる (*Sirat al-Manṣūr*, pp.207-208)。
- (40) なお、この時期のザイド派勢力のヒジュラは、7世紀の大征服時代におけるミスルへのヒジュラとの類似が認められる点において、興味深い現象である。
- (41) *Ghāyat*, I, p.239.
- (42) *al-Ḥūr al-‘In*, pp.208-211.
- (43) W.Madelung, “The *Sirat al-Amirayn al-Ajallayn al-Sharifayn al-Fāḍlayn al-Qāsim b. ‘Alī al-‘Iyānī* as a Historical Source”, *Studies in the History of Arabia: Sources for the History of Arabia*, part.2. Riyad, 1979, p.29.
- (44) W.マードルングは、この訓令がアルファーディルの手によるものとしているが、史料には「ズー・アッシャラファインが訓令を記した」と

- 明記されている (*Sirat al-Amirayn*, fol.39a)。W.Madelung, “The Origins of the Yemenite Hijra”, p.29.
- (45) W.Madelung, “The Origins of the Yemenite Hijra”, p.29.
- (46) *Sirat al-Amirayn*, fol.85a.
- (47) “SHAHĀRA”, *E.I.new. ed.* IX, p.201. なお筆者は、1996-98年のイエメン滞在中に二度、シャハーラを実地調査した。
- (48) *Şifat*, p.238. Robert T.O.Wilson, *Gazetteer of Historical North-West Yemen*, New York, 1985, p.206.
- (49) ガイル (ghayl) は通常、地表面を流れる小さな川を意味するが、イエメンではイランのカナート (qanāt) やオマーンのアラジュ (falaaj) と同様に、地下水溝を意味する。cf.R.B.Serjeant, “The Ghayls of Ṣan ‘ā’”, *Ṣan ‘ā’: An Arabian Islamic City*, ed. R.B.Serjeant, R.Lewcock, London, 1983, p.19.
- (50) *Sirat al-Amirayn*, fol.51a.
- (51) *Sirat al-Amirayn*, fol.85a.
- (52) この他にもシャハーラについては、「このヒジュラには人々のためにマスジドが建設され、金曜日になると、ズー・アッシャラファインが礼拝をおこなった」とあり、日常的な宗教的義務を実践してザイド派勢力の結束を確認し合う施設も備えられていた (*Sirat al-Amirayn*, fol.46b)。
- (53) *al-Idrisi*, I, p.55, *Şifat*, p.224. 皮革製品のほかに、農具や諸々の農作物が生産された。
- (54) *al-Muqaddasi*, p.87, *al-Iṣṭakhri*, p.24.
- (55) *Ta’rikh al-Mustabṣir*, p.204.
- (56) *Sirat al-Amirayn*, fol.48b-49b.
- (57) *Sirat al-Amirayn*, fol.14a.
- (58) W.Madelung, “The Origins of the Yemenite Hijra”. pp.29-30.
- (59) *Sirat al-Amirayn*, fol.51a.
- (60) シャハーラが「権威の場」として言及されているのは、他に多数散見する (*Sirat al-Amirayn*, fol. 35a, 49a, 68b. など)。
- (61) *Sirat al-Amirayn*, fol. 68a-68b.
- (62) *al-Muqaddasi*, p.87.

- (63) W.Madelung, "The Sirat al-Amirayn al-Ajallayn al-Sharifayn al-Fāḍlayn al-Qāsim b. 'Alī al-'Īyānī as a Historical Source", p. 72. (64) *Sirat al-Amirayn*, fol. 48b-49b.
- (65) *Durar al-Aḥādīth*, p.204.
- (66) *Durar al-Aḥādīth*, p.204.
- (67) ハーディーの墓所にはその後、ムフタル al-Mukhtār al-Qāsim b. al-Nāṣir [d.366/977]、ユースフ Imām Yūsuf [d.403/1012] といったハーディーの子孫たちも埋葬された。
- (68) *Durar al-Aḥādīth*, p.204.
- (69) *Sirat al-Manṣūr*, p.25. なお、スライフ朝に関する包括的な研究は現在のところ、以下の研究以外ない。Ḥasan b. Fayḍ Allāh al-Hamdānī, *al-Ṣulayḥiyyūn wa'l-ḥarakat al-Fāṭimiya fi'l-Yaman*, Cairo, 1986.
- (70) イスラーム世界の墓参詣に関する包括的な議論については、大稔哲也「イスラーム世界の参詣」『岩波講座 世界歴史10』岩波書店、1999年、149-180頁を参照のこと。
- (71) *Ghāyat*, I, pp.247-249, 254. al-Hamdānī, *al-Ṣulayḥiyyūn*, p.87.
- (72) *Ghāyat*, p.250. また同じ *Ghāyat* の記述に拠れば、イマーム=アブー・アルファトフは437/1045-46年、ダイラム地方 (bilād Daylam) よりイエメンに到来した、ザイド派イマームの一人 (*Ghāyat*, I, p.246)。
- (73) *Ghāyat*, I, pp.251-252.
- (74) *Sirat al-Amirayn* に見えるザイド派勢力によるメッカ、メディナのシャリーフ政権との接触事例は次のとおり。1) シャリーフ=アルファーデイルはメッカのアミール=シュクル・ブン・アブー・アルフトゥーフ Shukr b. Abū al-Futiḥ とハサン家 (Banū al-Ḥasan) に対して人員および軍資金 (māl) の支援を要請 (fol.16b.)。2) 452/1060年シャリーフ=アルファーデイルは同じくメッカのアミール=シュクルに対して、馬と驃馬を二頭ずつからなる贈り物をズー・アッシャリファインに託したが、シュクルはその返礼として金を送った (fol.23a-b.)。3) 459/1067年シャリーフ=アルファーデイルは自らメッカに赴き、メッカのアミール=ムハンマド・ブン・ジャアファル Muḥammad b. Ja'far との会見を望んだが叶わず (fol.27a.)、メディナを訪れたが、メディナのアミー

- ル＝ムヒート・アルハサニー Mukhiṭ b. Aḥmad al-Ḥasani はエジプト滞在中で不在であった (fol.27b.)。
- (75) なお、ヒジュラの意味の変質理由に関連して、なぜサアダとシャハーラの二都市だけが、11世紀後半にヒジュラとされたのかという問題が生じてくるが、筆者は今のところ、この問題に対して答え得る史料を見出せないでいる。しかし筆者は現在、この問題について以下のように考えている。すなわち、ヒジュラとされたのは当初、サアダのみであった。つまり、10世紀末期には聖域となっていたサアダは、11世紀半ばから後半において、ザイド派イマームがそこを護持することによって、政治的権威と宗教的権威が並存する場であったと考えられる。しかし同じ11世紀後半に、スライフ朝政権の勢力が急速に強大化すると、もはやサアダは防衛上、政治的権威であるザイド派イマームにとって安全な場所ではあり得なくなった。そこでザイド派勢力は、自然の要塞たるシャハーラの機能に着目し、460年ラマダーン月末日/1068年8月2日にそこを掌握した後、ザイド派の政治的権威の所在する場としてのシャハーラを成立させたのである (*Sirat al-Amirayn*, fol.32b-33a.)。この結果、それまで宗教的権威と政治的権威とが並存していたヒジュラが、サアダとシャハーラとの両都市に二極化することとなったのである。

*本稿は、平成13年度文部省科学研究費（特別研究員研究奨励費）の交付を受けた研究成果の一部である。